二七日のご和讃

阿弥陀仏の御名をききぬ
歓喜讃仰せしむれば
功徳の宝を具足して
一念大利無上なり

たとい大千世界に
みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名をきくひとは
ながく不退にかなうなり

阿弥陀仏の御名（南無阿弥陀仏）を聞かせていただき、心から有難いと喜び、ほめ讃えて、一声でも念仏を称えるならば、その御名に満たされた功徳の宝は念仏者の身に具わり、阿弥陀仏の浄土に生まれ往くというこの上ない大きな利益を賜るのです。

たとえこの広い世界が燃えさかるようなことが起きたとしても、それをものともせずその炎の中をくぐりぬけて仏の御名（南無阿弥陀仏のいわれ）を聞かねばならない、聞信させていただいた者は、同時に、もれなく阿弥陀仏の浄土に往生させていただくことが決定するのです。

岐阜地区出版委員会（真宗大谷派岐阜高山教務所 TEL.058-266-1378）

二七日

―南無阿弥陀仏のいわれを聞かせていただくこと それが本当の信心をたまわることです

初七日が過ぎ二七日をお迎えになられました。まだまだ亡くなられた事を実感として受け止めることもできず、悲しみの中でお過ごしのことと存じます。

昨今、大切な仏事である葬儀そのものにおいても、時代の流れとともに営み方が変わってきているように感じます。本来、つながりや縁を確かめ合うはずの葬儀が、ややもするとそのつながりや縁を切る場になっているように思えてなりません。そもそも葬儀は、亡き人と共に生きた喜びを確かめ合い、亡き人に感謝する場であります。また、親族、知友等、有縁の方々とさらにつながりを深めていく場であるはずです。さらには、葬儀は亡き人を諸仏といただき、その声を聞かせていただく聞法の場でもあります。

蓮如上人のお言葉の中に「ただ、仏法は、聴聞にきわまることなりと云々」とあります。この先、だれもが生活していく中でつらいことや苦しいことに遭遇することが多々あるかと思います。私たち一人ひとりが、〝人生において何を拠り所として生きるのか、南無阿弥陀仏に聞き訪ねてほしい、そして真の人生を歩む者となってほしい〟と、お亡くなりになった方から願われているのではないかと思うのです。

寺院名